

「やる気応援奨学金」レポート

カリフォルニアで環境を学ぶ 多様な人が共存し刺激を受ける

法学部政治学科四年 坂上 怜弥 (東京都立三鷹高校)



海洋学の初回の授業、教壇には白い犬がいた。前方で一匹が座っているのだ。スケートボードに乗りながら学生が教室に集まり始めた。教室の最前列にはパーカーと短パンを身に着けた白髪のおじさ

ん。サングラスを掛けた学生と談笑している。そのおじさんが授業を始めた。白い犬は教授の愛犬だった。授業が始まると、犬は教室をうろろうしている。私は隣に座る経済学専攻のスイス人と一緒にその犬の写真を撮った。

会に恵まれた。本稿では、留学生活を振り返り、今回の留学が人生においてどのように位置付けられるかを考える。

留学に至る経緯

海沿いのサンタバーバラはリゾート地として有名だ。温暖で低湿度の地中海性気候。雨はめったに降らない。ロサンゼルスから近いこともあり、この最高の環境に引かれ世界中から観光客が訪れる。University of California, Santa Barbara (UCSB) はそこに位置する。私は運良く「法学部やる気応援奨学金」をいただき、UCSBに一〇カ月間留学する機

幼い頃から漠然と海外に興味があったため、大学入学直後から長期休みの度に一人で世界各国を旅行した。海外での遊びにある程度慣れると、実力がないにもかかわらず根拠のない自信が付いてしまっていた。良くない学生の典型である。自らの知見が狭いものであることに気付いていなかった。

その翌日、留学を決意した。短絡的だったが、「後先考えず飛び込む勢い」だけは評価出来たかも知れない。ゼミで学んでいた環境政策が有名、かつ多様な人間が共存する場所という二つに当てはまるUCSBへの留学を決めた。特に再生可能エネルギー政策に関するさまざまな情報を得て、自分の考えをアウトプットすることを具体的な目標の一つにした。

地の利を生かした環境政策

「発言しない学生の成績は、最低のC」。米国内の環境政策を扱う

転機は二年次の終わりだった。国際環境NGOでのインターン中に同NGOドイツ支部と会議があり、参加を許された。正確には、ただ座っていただけだった。活発



海洋学の授業風景

授業で教授が言った。何か発言するに必死だった。予習した文献について講義を受け、ディスカッションをし、ペーパーを書く。ディスカッションでは共有地の悲劇（ある集合体におけるメンバーが

協調的に動けば、メンバー全体に利益がもたらされるにもかかわらず、実際はそれぞれのメンバーが個々の利益を求め行動してしまうことで非協力的な環境が生まれ、集合体全体の不利益が増大する（Not In My Back Yard）とNIMBYism (Not In My Back Yard)：風力発電設備の必要性は認めるが、自分たちの住む地域には建設するなどという主張など）といった基本的な理論に当てはまる環境問題のケースを取り上げ、政策提言を行った。グループ作業も多く、留学生は良い意味でも悪い意味でも目立つが、少し風変わりな視点から意見を出すと喜ばれる。また学期末には個々にレポートが課された。この授業では、自分で考えをまとめ、TA (Teaching assistant) : 原則は大学院生)と議論して初めて執筆が始まる。執筆中も頻繁にTAと議論を重ね、レポートを書き上げる。それぞれの学部生が持ち寄るケースについて議論出来る大学院生の知見の広さ

には驚愕した。他方、TAは身近な存在で何でも相談出来る。あるTAは、スケートボードで校舎内を疾走していたし、オフィスアワーに訪れるとひたすら欧州サッカーの話をするTAもいた。

私はNIMBYismのケースとして、マサチューセッツ州の洋上風力発電施設を取り上げた。施設建設を巡って地方政府と住民、あるいは住民同士が対立したケースだ。洋上風力発電を巡って同様の問題が今後日本でも増えるだろうとの理由からだ。洋上風力の拡大のためには、徹底的な情報開示、意思決

定への住民参加、あるいはスマートグリッド(需要と供給の両側から電力を制御する送電システム。使用量に応じた無駄のない電力供給が期待されている)の整備などが鍵であると主張した。成績の良い学生はワシントンDCのインターシップに参加出来たため、熱心な学生が周りに多く刺激的だった。

気候変動について科学的な側面から学ぶため、理系寄りの授業も履修した。海洋学や気象学では、気象データを基に干ばつの原因を調査したりと、文系学生の私には新鮮だった。また、再生可能エネルギーのエンジニアリング関係の授業にはゲストスピーカーが来ることが多く、学生に人気だった。太陽光発電に関する技術やサービスを提供する SunPower の社員がゲストとして授業に参加した時には、その場でインターンをしたいと頼んでいる学生もいた。

これらの授業を通して、再生可能エネルギー政策に関するアメリカ、ないしはカリフォルニアの姿勢がうかがえた。技術開発に注力し、再生可能エネルギーを拡大しようとの積極的な姿勢が見られるが、それは広大な土地が確保出来

るからこそだと実感した。特に南カリフォルニアでは、超大規模太陽光発電計画や全く新しいデザイン風の風力発電施設など、広い土地と技術革新を柱としている。また、安定した天候や広大な土地といった地理的な特長によって、発電量のうちの一定量を再生可能エネルギーから供給しなければならぬ、といった政策が機能しやすい状況にある。アメリカの再生可能エネルギーへの取り組みは学ぶに値するが、日本がそのままねられるものではないともいえる。また、

民間企業が再生可能エネルギー普及に向けて積極的に投資している。グリーンが良い例で、本社オフィスの電力の一部を自前の自然エネルギー発電で賄っていたり、モハベ砂漠の風力発電事業に投資していたりする。

UCSBの授業には共通する点が見えた。第一に、さまざまな関係者が授業にかかわっていること。外部ゲストが授業に参加することで、授業で学んだ「点」が、実社会でどのように生きていくか理解出来る「線」になる。第二に、すべてがフラットなコミュニケーションの上に成り立っていること。教授やTAあるいは学生同



キャンパス内のビーチ

士、リスベクトし合い、お互いから学ぶ。第三に多様なバックグラウンドを持った人間が同じ教室にいること。人種や国籍などの多様性はもちろんのこと、さまざまな専攻と目的を持った学生が同じ場で学ぶことで、自分にはない考えや意見、知識を広く吸収出来る。また、全く意見が合わない人といかに課題を進めていくか、といった実務的な力が身につく。冒頭の海洋学の授業風景はこれらを凝縮した例だ。

刺激的な共同生活

アパートでは、世界各国から集



サッカーチームのメンバーと

まった若者たちと共同生活を、多くのことを学んだ。特に、ルームメイトである一八歳の中国人 James から強い影響を受けた。彼は高校まで中国の教育を受け、正規学生として UC SB に入学した。彼の英語は私よりはるかにうまかったが、James によると彼が受けた英語教育は読み書き中心で、話を聞く限り日本の英語教育と大差なかった。昨今、「日本の英語教育は悪い」と議論されることもある。確かに環境は重要で、人間は環境に大きく左右される。だが何事もシステムや環境のせいにするのではなく、まずは「個人がどれだけやるか」が最も重要だと James に気付かされた。また、恵まれた環境にいても、それを生かすのは自分次第だ。

UC SB の学生は、「Study hard, Play hard」という信条の下、日々を過ごす。何に対しても全力だ。特に私が所属したサッカーチームのメンバーは強烈だった。遊びでサッカーをしていたのに、足が走るまで走る人やメンバ

ーを叱咤激励する人もいた。試合ではけんかが起きて退場者が出る。また、パーティーがあったり、キャンパス内にビーチがあることでリゾート気分になったりと誘惑は多い。だが週末はパーティーで馬鹿騒ぎをする一方で、平日は図書館にもつてひたすら勉強するといった切り替えが皆うまい。何をするかは自分次第、返ってくる結果も自分次第、それがサントババラという自由だった。アメリカの学生は皆ハードに勉強するといったイメージがあるが、全員がそういうわけでもない。授業にある程度出席し、あとはパーティーをしている学生もいる（アイビリーリーグなどでは違うかも知れないが）。反対に、勉強とネットサーフィンばかりしている学生もいる。やはりその環境において、何を目的に、何をすべきかを自分で見極め、優先順位を付けて日々を過ごすことが大切だと感じた。

「とりあえずやってみなよ」

一〇カ月の留学は長期として見なされるが、じっくり学問を修めたり、その土地のことを理解するにはやはり短過ぎる。ただ、この期間で再生可能エネルギーを取

り巻く現状の一部を理解出来たし、新しい考え方も吸収出来た。特に、「若いうちに恐れることなく挑戦し、失敗しながら学ぶようになってくこと」が最も大きな収穫だ。カリフォルニアでは「面白いね、とりあえずやってみなよ」という環境があり、とにかく挑戦している人を強くサポートしてくれるカルチャーがある。シリコンバレーを筆頭に新しいアイデアが次々と形になるのは、このカルチャーに大きく起因しているのかも知れない。やはり環境は人間に大きく影響を与える。しかしそれらを生かせるかは自分次第だ。

今回の留学は、私がほんの一部の狭い世界しか知らないことを改めて実感出来たと同時に、もっと多くの世界を見てみたいという好奇心を刺激してくれた体験だった。人生においてこの留学は、私はまだまだ小さく未熟であることを再確認出来た期間として位置付けられるだろう。

最後になりましたが、「やる気応援奨学金」関係、また留学関係でお世話になった方々に心から御礼申し上げます。自分がいかに恵まれているかを実感しました。ありがとうございました。